

# 町民ドックだより

2011  
VOL. 47

このコーナーは、今までに町民ドックに携わった先生方から、健診から得られた成果などついて、シリーズでお伝えするコーナーです。

第47回目は、名古屋大学耳鼻咽喉科 名古屋女子大学の片山直美先生のお話です。

## 2009年度に行われた耳鼻咽喉科検診における においと味の検査結果

名古屋大学耳鼻咽喉科、名古屋女子大学  
片山直美

2009年度に行われた耳鼻咽喉科検診における結果についてご報告いたします。2008年度にはにおいの検査による嗅覚障害についてお話ししましたが、2009年度はにおいの検査とともに味についても検査を行うことができましたので、嗅覚障害と味覚障害についてお話しいたします。受診者は、男性153名、女性278名の合計431名で、60代の受診者が男女ともに一番多く、次に女性では50代、男性では70代が次に多い結果となりました。

嗅覚は2008年度と同様に行われ、においステイック（第一薬品産業株式会社製）を用いて、13種類の（墨汁、木材、香水、メントール、みかん、カレー、家庭用のガス、ばら、ひのき、蒸れた靴下・汗臭い、練乳（コンデンスミルク）、炒めたんにく、無臭）を嗅ぐことによって、それぞれの解答用紙に示されている6種類のにおいのうちから1種類を選んで指さし方法で行われ、2008年度は女性のみを検査でしたが、2009年度は男女ともに検査を行いました。女性の結果は、2008年度と同様にこの検査を開発した織部らの結果とほぼ同様で、統計学的有意差はありませんでした。男性についても行われ、女性と同様に織部らの結果との間に統計学的有意差はありませんでした。やはり、年齢とともに認知できるにおいの数が減り、80代は40代、50代に比べて約半分になりました。

女性はメントールのにおいの認知が悪く、男性は全体的に年代が高くなるとほとんどのにおいの認知が悪くなりますが、男女ともに「カレー」のにおいや「蒸れた靴下・汗臭い」のにおいは認知できていることが分かりました。やはり日々の生活で触れることが多いにおいについては認知能力が高く保たれ、経験が少なくなるにおい、今回は「練乳」「ひのき」「家庭用のガス」などの正答率が低くなりなした。

味覚は生命維持に必要な食欲を増し、満たす感覚で、脳生理学ばかりではなく、栄養学、調理学、食文化、宗教、政治、地理的条件までもかかわる広範な論点を持っています。味覚はまず、食べ物の中にある水溶性の物質が、主に舌や軟口蓋に分布する味蕾に接触することで、科学的感覚とし

て生じる。人の味覚の評価は、「味の強さと質」の両面から行われ、その味物質の刺激に対する検知能力と認知能力を測定することが重要となります。今回の八雲町の検査において、ソルセイブ（アドバンテック社製）による塩味検査とテーストディスク（三和化学研究所製）による甘味、塩味、酸味、苦味検査を行いました。

塩味においては全体で、91.2%の受診者が正常範囲で、要観察が4.5%、要精検が3.4%でした。同様に甘味において全体で79.1%の受診者が正常範囲で、要観察が16.1%、要精検が4.8%でした。酸味において全体で73.9%の受診者が正常範囲で、要観察が21.4%、要精検が5.5%でした。苦味において全体で78.1%の受診者が正常範囲で、要観察が19.1%、要精検が2.8%でした。

これらのことから、今回の検診で、嗅覚と味覚の両方または一方に何らかの異常のある受診者は全体の32.4%であることがわかりました。今後さらに検査を続けて、これらの受診者の方々の嗅覚と味覚がどのように変化していくかを観察する必要があります。

今回の結果から、加齢とともに味覚、嗅覚の認知能力は衰えていくことから、できる限りさまざまな味やかおりに触れて認知能力を保つとともに、味やにおいが分かりにくい場合はできるだけ早急に耳鼻科を受診していただきたいと思います。なぜならば、さまざまな疾患によって味覚や嗅覚が損なわれるからです。例として、亜鉛不足や鼻中核湾曲症、鼻ポリープ（鼻たけ）、唾液量の不足やウイルス感染症（風邪、インフルエンザなど）があり、また特に脳腫瘍、パーキンソン病、アルツハイマー病、脳卒中などの神経疾患は味覚や嗅覚を損なう危険性があります。早期発見早期治療をすることをお勧めいたします。おかしいと思ったらぜひ、耳鼻科を受診してください。より詳しい味覚ならびに嗅覚検査を行います。

